

内閣総理大臣 賞

## 学ぶことは生きること

岡山県 岡山県立岡山操山中学校 2年

小西 珠生（こにし たまき）

目を閉じて想像して欲しい。あなたは日本人で大人だと仮定しよう。家から一歩外に出ると、あなたは不安で落ち着かず、自信がなくなる。街を歩くと、目に入る看板や案内の文字が分からず、あれは何を意味しているのだろうと考える。そしてそんなことも分からない自分はクズだと思う。バスに乗っても、「運賃」という漢字や行先を告げる文字が読めず、乗るのが怖くなる。自分はいつも不確かで分からないものに囲まれた世界で生きていると感じる。あなたは、なぜこんなに困っているのだろうか。

私は今年の夏休みに、岡山自主夜間中学へ学習ボランティアとして通った。先ほどの例は実際にここに通われているAさんの話だ。Aさんは幼い頃に大病を患い、小学三年生から不登校となった。中学校もほとんど通わないまま卒業証書だけを受け取った「形式卒業者」である。きつい肉体労働の仕事に就くが病気のために辞めてしまい、その後も職を転々とした。字が読めない、書けない、計算ができないために仕事が選べず、恥ずかしい思いを数え切れないほどしてきたという。

夜間中学校とは、Aさんのように不登校など様々な事情で十分な教育が受けられないまま中学校を卒業した人、現在不登校の中学生、戦後の混乱期の中で義務教育を修了できなかった人、外国籍の人など多様な背景を持った人々に義務教育を受ける機会を保障するために作られた学校である。現在、全国に公立夜間中学校が八都府県で三十一校、ボランティア団体等が行う自主夜間中学校は十六都道府県で三十七校ある。私がボランティアに通った岡山自主夜間中学には、十代から八十代までの五か国の生徒が約四十人通っている。生徒はみんな私と同じ「中学生」ということだが、教室を見渡すと多様性に富み、世の中には本当に様々な中学生がいるものと驚いた。

ある日、私は自分の祖母よりも年上であるBさんの分数の勉強を手伝った。ここでは基本的に先生と生徒が一对一で勉強する。Bさんは、現役中学生の私がボランティアとして通っていることに驚き、なぜ自分が今になって夜間中学に通っているのか、義務教育を受けなかったために、今までどれほど苦勞して生きてきたのかを話してくださった。そして「珠生ちゃんのように若い時にこんな勉強ができていたら、今頃もっと幸せなのかねえ。」と呟かれた後、驚くべきことばを發した。

「今日習ったことを忘れてたくないから、宿題を出してください。」

と言われたのだ。私は自分の耳を疑った。宿題は私の天敵である。私が通う中学校では、生徒の意志に関わらず、自動的に宿題が山のように出される。勉強が得意ではない私は、

「どうして勉強しなければいけないの？こんな勉強、何の役に立つの？」

と学ぶこと自体を否定し、宿題も嫌々していた。だから、Bさんに宿題が欲しいと頼まれたとき、私は自分が恥ずかしくなった。Bさんをはじめ、夜間中学に通う方たちの学びに対する情熱がまっすぐでとてもまぶしかった。そして多くの方は、この夜間中学へたどり着くまで「何のために学ぶのか」など考える余裕もないほど、ただ必死で生きてこられたことを思うと、自分がいかに恵まれていて甘えているのかを痛感した。

統計的には、日本の義務教育課程における就学率は約九十九パーセントだ。しかし、全国夜間中学校研究会の推計では、一度も学校に通ったことがない未就学者と小・中学校中退者を合わせると、全国で百数十万人の義務教育未修了者がいるという。その中には複雑な家庭環境を背景に、出生届を出していない無戸籍児、親の虐待、ひきこもりや不登校など、様々な社会の問題が原因で義務教育未修了者となった者もいる。私たちは日本国憲法や教育基本法等で、教育を受ける権利を保証されているはずである。しかし現実には夜間中学で出会った方たちのように十分な教育が受けられず、劣悪な状況に追いやられて生きている人たちがいることを私たちは忘れてはならないと思う。学びを求めている人たちに、もっと「教育の機会」を届けたい。

私が尊敬するマララ・ユスフザイさんの国連でのスピーチが私の背中を押してくれる。

「一人のこども、一人の教師、一冊の本、そして一本のペン。それで世界を変えられます。教育こそがただ一つの解決策です。教育を第一に。」

私は本当に小さなことしかできないが、これからも夜間中学の学習ボランティアの一員として、学びの場を守り、共に学んでいきたい。学ぶことは生きること。私はこの夏、岡山自主夜間中学の皆さんに、学ぶことの意味を教えていただいたと思う。

## 弟が教えてくれたこと

熊本県 天草市立本渡中学校 1年

松本 華英（まつもと はな）

私は、父、母、妹、弟の五人家族です。その中の弟は、ダウン症候群という障害をもっています。

ダウン症とは、約 800 人から 1000 人に 1 人の割合で生まれて、普通は、46 本の染色体がありますが、ダウン症の方は、47 本あり、一般的に発達はゆっくりで個人差があるそうです。

私の弟は、私が五歳の時に生まれました。生まれてすぐ救急車で熊本の病院へ運ばれて行ったのを十三歳の今の私でも覚えています。すごく肌が真っ白で、生まれた時泣き声も聞こえず、すごく心配でした。私は弟とも会えず何もしてあげられなく辛かったです。

しかし、幸いなことに心臓の手術は成功しました。入院中、弟の病院へ行くことはできても、直接弟と会うことはできませんでした。決められた時間にガラス越しに見える弟の姿に、ショックで言葉も出ませんでした。鼻や胸などチューブが体中に入れている状態でした。なぜこんな小さな男の子がこんな目に遭わなければいけないのかその頃私にはよく理解できませんでした。

そして三ヶ月後、弟は退院し、一歳半になると手話ができるようになり、手を使って自分の思いを伝えるようになりました。二歳になると歩けるようにもなりました。自分のペースで頑張っている弟が私に元気や希望をたくさん与えてくれました。

十二歳の頃、私は二つの記事を見ました。それは私にとってはとても衝撃的なものでした。その記事の内容は、新出生前診断についてです。日本で 2013 年に取り入れられたもので、お腹の中にいる赤ちゃんが障害等を持っているのか調べる診断でその検査は 99% 正確な結果が出るというものでした。そこで約 800 人が異常があるという理由で赤ちゃんを中絶したそうです。

また、もう一つの記事には、アイスランドでダウン症の子供が生まれてこない社会を目指しているという記事です。なぜそんな社会にしていきたいのか全く理解ができません。

私の家族にとっては、弟が生まれて良いことばかりが起こったと感じます。例えば、私はスポーツなどで勝つのが一番大事だと思っていました。しかし弟を見て、みんなと一緒にスポーツを楽しみ、大会に喜んで参加している姿やマラソンで最下位であっても周りで応援している人に笑顔で手を振っている姿を見て、ス

ポーツの目的は、決して優勝することだけではないと、考えさせられました。

母は、弟を産んでいろいろな人と出会い他の人の気持ちがよく分かるようになり、弟のおかげで母もたくさん学ぶことができているととても感謝しているそうです。

父は、弟の誕生をきっかけに、障害を持つ人が社会に参加できる事業を立ち上げました。やりがいのある実りある仕事が今できているのは弟のおかげだと話しています。

このように、私の弟は私たちの家族にはなくてはならない存在です。ダウン症の人がいない社会を目指すのは大間違いです。ダウン症の方は、多くの人たちと同じで様々な性格の方がいますが、私の出会ったダウン症の方は、ほとんどの方が人付き合いがうまく、陽気で思いやりのある人が多いです。どんなに勉強やスポーツが苦手であっても、どんなに成長するのが遅くてもダウン症の人は周りの人をとても幸せにしてくれます。私の弟もそうです。そういう人が、この社会には、とても重要な人だと私は思います。

しかし残念ながら、ダウン症の人は社会の一部から見ると価値のない人間だと思われています。そのような見方をする人は、完璧な人間を目指しているのでしょうか。私は、人が完璧でないという理由で命を奪う社会はとても恐ろしいと思います。そうなるのであればお腹の中の赤ちゃんにちょっとした異変があれば社会は中絶を勧めるのでしょうか。これからの未来がすごく心配です。

世の中には、いろいろな人がいるからこそそれぞれが個性を出し合うことで社会が明るくなり、人や国が豊かになると思います。

ある時、母が私にある事を聞きました。

「もし、弟からダウン症という障害を取る事ができるのであれば取りたい？」と。その時、私は絶対にとって欲しくないと思いました。今の弟が、私の大切な弟だからです。成長が遅くても、発音が完璧でなくても、スポーツがそんなにうまくなくても、私の明るい、面白い弟は、私にとっては、そのままで完璧な弟なのです。

## 待つ

山口県 防府市立桑山中学校 3年

澁澤 佳奈実 (しぶさわ かなみ)

私の祖母は、目があまり見えていません。視界の中心が見えないという目の病気です。私はこの祖母と、週末になるとスーパーに買い物に行きます。

スーパーに行くと、祖母が探している品物のところに行きます。そこでは、やはり、祖母の視力では、知りたい品物の情報が読めないことがよくあります。祖母は、ここ最近耳も遠くなっています。ですから、私が文字を祖母の耳の近くで読むのです。すると、いつも「ありがとうね。」と祖母は言います。祖母は、私のことをとても頼ってくれています。

他にもスーパーに行くと困ることがあります。それはお金の支払いです。レジの店員さんから言われる値段が、よく聞き取れないことと、お札や小銭を取り出すのにとても時間がかかることです。ある日、こんなことがありました。祖母がレジで、一枚ずつ小銭を財布から出していた時です。祖母の後ろに並んでいた人が、「チッ。」と舌打ちをしたのです。横目で見ると、靴底で床を蹴り、せわしなく貧乏揺すりを始めました。祖母の会計が遅くて、イライラしている様子がはっきりと伝わってきます。私は焦り、祖母から財布を預かると、急いでお金を支払いました。「なぜ、待ってもらえないのか。誰もが同じように素早くお金が払えるわけではないのに。」と、とても悲しい思いをしました。

しかし、別の日、こんなことがありました。その日は特にレジが混んでいました。その時の私には、あまり心に余裕がなかったのだと思います。レジで支払いをする祖母の後ろに、長く列が続いていました。それを見た私は、つい焦ってしまい、一人でお金を払おうとしていた祖母に言いました。「おばあちゃん。もうちょっと急いでよ。」と。すると、祖母の後ろに並んでいた一人のおばあさんが言われました。「そんなに急がんでもいいよ。あんまりあなたのおばあさんを急かさないであげて。」私はその時、気が付きました。自分がしたことは、前にスーパーで出会った舌打ちをした人と同じだということにです。なぜ、あのようについ口調で言ってしまったのか、待つことができなかったのか、自分を責めました。その日祖母は、いつもの「ありがとうね。」ではなく「ごめんね。」と言いました。自分の中で、恥ずかしい気持ちと悲しい気持ちが渦巻いていました。

私は祖母と一緒に生活することで、大切なことを学びました。それは「待つ」ということです。自分の心に余裕をもって、急かすのではなく、相手を「待つ」ということが大切だということ。誰もが同じようにできるわけではないこと

に気付かなければなりません。時間がかかる人も当然いるのです。祖母の後ろに並んでおられたおばあさんは、その後ゆっくりと会計をされていましたが、誰も急かす人はいませんでした。この、「待つ」ということは高齢の方だけでなく、小さな子どもや障害のある方にも通じるものだと思います。

他にも考えさせられたことがあります。これも会計の時の出来事です。いつものように私が支払いを手伝おうとしました。すると祖母から「一人でもできるよ。」と言われたのです。お金を支払うときの手伝いは、特に頼まれたわけでもなくしていました。この行為は、「おばあちゃんが困っている。」という私の判断や、「早く払わなければ。」という私の焦りからくる行動だったと思うのです。祖母の人権を尊重しての行動ではありませんでした。人の人権を尊重することと、人を手助けすることとは全く違うことに気が付いた瞬間でした。私は自分の思い込みで行動してしまい、親切を祖母に押しつけるような形になっていました。祖母のできることまで、待たずに奪っていたこととなります。相手の気持ちをよく考え、お互いに気持ちよく支え合うことが大切なのだと思います。

もう一つ、祖母に教えてもらったことがあります。祖母は、いつも顔を合わせる度に声をかけてくれます。そして、私が何かするとすぐ、「ありがとうね。」という言葉返してくれます。この声掛けは、気持ちを温かくしてくれます。祖母は、私たち家族にとってもよくしてくれます。でも、私は母に言われないと「ありがとう。」と感謝の言葉を伝えるのを忘れてしまいがちです。感謝の言葉に限らず、挨拶は相手のことを確認し認める行為だと聞いたことがあります。そうならば、相手に感謝の言葉をかけたり、挨拶をするということが、相手の人権を尊重する第一歩ではないかと思いました。それなら私にもできます。人権の尊重と聞くと、何かとても難しいことのように感じていましたが、こんな身近なところでも人権尊重の精神は生かせるのです。

私は祖母から、皆がもっている人権を大切にすることを沢山もらいました。このヒントを無駄にしないよう、私にできることを一つずつ実践していきたいと思います。

## 「自分の種類とその性別」

佐賀県 白石町立白石中学校 3年

小川 一花（おがわ いちか）

今は成長もあって珍しいことになったが、昔私はどこに行っても男の子に間違えられた。初対面の人は必ず私の顔を見ては首をかしげ次に出てくる言葉は「男の子？」だった。一応否定していたものの、私にとってそれは確かにうざったいことではあったが、男の子と思われることに対しては嫌ではなかった。どちらかというとかっこいい物のほうが好きだったし、女の子のような身なりにはなりたくないと思っていた。何より自分が女の子であることに少し違和感があった。祖母から「女の子なんだから」と言われるたびに嫌な気持ちになり、ワンピースもピンク色も身につけないようになった。

しかしそれは昔の話であって、今は「女の子用の物」嫌いも幾分かやわらいだ。そんなある日、私は「LGBT」という性的少数者に指す言葉を初めて知る。「LGBT」はそれぞれの頭文字で、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーを組み合わせたものだ。同性が恋愛対象の人、異性同性共に好きになりえる人、心と体の性別が一致しない人。私はその人たちの存在にすごく興味を持った。その当事者たちの苦勞話の記事をたくさん読んで、その苦しみを理解していくうち、あたりまえに過ぎる日常や、決して深い意味のない言葉に苦しめられていたのだと知った。しかしそれは私にあてはまるものではなかった。まだ少しもやっとする気持ちを残しながら、もっと深く調べていくうち、新たに「LGBT」という言葉だけでは表せない性、「LGBTQ」を知り、「Xジェンダー」にたどりついた。その記事を読んでいくうち、長年のわだかまりがとける瞬間が分かった。Xジェンダーとは、男性、女性に完全にあてはまらない人を指すものである。その自認は人によって多様で断定できるものではない。例えば私だと、女でありたくないが男になりたいわけでもない無性と呼ばれるものになる。今はそれが一番しっくりくる性自認だ。私は自分が女性だとどこかであきらめていたのだろう。Xジェンダーの例にあてはまる部分がたくさんあったことで、仲間がいるということ、別におかしくないということが分かってスッキリした。やっとな自分という人間の種類がはっきりしたように思えたからだ。

しかし、自分のようなXジェンダー、LGBTQをすんなり受入れてくれる人はいるのだろうか。一般的に考えてそのような人は少ないと思う。その人たちにとって異性を好きになることがあたりまえで、性別の例になるような格好でいることを普通とする。それは私たちにはあてはまらないことだ。つまり「普通ではな

い」と判断されてしまう。それによっていろんな偏見が生まれ、差別されてしまうので心に秘めたままの生きづらい世の中になってしまう。私は叫びたくなった。「普通」とは誰が決めたのか。誰かが決められるものなのか。何故自分を隠さねばならないのか。そう考えるとこの世の中はおかしいことであふれている。

今の時代、LGBTQ がメジャーになりつつある。支援団体の発足や LGBT という言葉の広がりなどで、テレビにとりあげられたりして世間による認知も高まってきたと感じる。私たちマイノリティーに共感しろとは言わないが、理解してほしい。「どうせ女だろ」「そんなことして何になる」「普通にしろよ」全て私たちが傷つけていることを理解してほしい。私たちは一人一人違う生きものだ。誰一人として同じ人はいない。しかし人間という生きものは支え合ってお互いを理解しあって生きていけるはずなのだ。今、この瞬間も心の溝をうめられない人が苦しんでいる。差別の目があるから、SOS も怖くて自分から出せない人もいるのだ。私達は助け合える。ぜひ手を差しのべて「大丈夫だよ」と言ってほしい。そしてもしも世間というような大きな壁があなたの自己をふさいでしまうのなら、どんなに小さくてもいいから救いを求めてほしい。それがセクシャルマイノリティーの理解を求め支援できることにつながると思う。そしてこの社会にはセクシャルマイノリティーが特別で異質なものという認識ではなくごく自然なあたりまえで人それぞれのものという認識をしてほしいと思う。

今や十三人に一人といわれている LGBTQ。決して他人ごとではなく、あなたの周りにも言わないだけでいるかもしれない。生きやすい世の中にするために女らしさ、男らしさを求めない社会になってほしい。私自身も自分のことを深く理解し、今後の行動に生かそうと強く思った。



## “ダイバーシティ”の推進力に！

東京都 八王子市立加住中学校 3年

瀬戸 秀一（せと しゅういち）

「夏の甲子園。」百回を記念する今年、全国から代表五十六校が出場し、連日、熱戦を繰り広げた。なかでも、秋田県立金足農業高校の快進撃と、校歌を一生懸命歌う姿は、投手の力投と相まって、大いに注目された。

そんななかで、私が最も注目したのは、高知商業高校の主将を務めた山中大河選手だ。山中選手の背番号は一〇番。レギュラーではない。主に三塁コーチとして選手たちを励ましつづけた彼が主将に選ばれたのは「部員の総意」と監督は語る。

山中選手の右手には親指と人差し指しかない。だから、ボールを投げるのもキャッチするのも、左手一本でおこなう。グラブを右肩と顎で挟んで投げるその技法は「グラブスイッチ」と呼ばれている。

かつて、米メジャーリーグには「グラブスイッチ」を操る投手がいた。一九八八年のソウル五輪で金メダルを獲得したほか、メジャー通算八十七勝をあげたジム・アボット氏。山中選手のプレースタイルは、アボット氏を参考にしているそう。

幼いころから、何度も何度も、限界を超えながら、身体と心を鍛えてきたのだろうと想像しながら、私は観ていた。山中選手のひたむきなプレーと三塁で仲間へ声をかけつづける姿に、私は胸が熱くなった。監督が語った「部員の総意」とは、きっと全魂を込めて野球に打ち込む山中選手の姿にあるし、自分との戦いのなかで培ってきた「人間力」によるのだろうと思う。

私の右手にも、山中選手と同じくハンディキャップがある。私の場合、親指が欠損していて、他の四本の指も曲げにくく、「物をつかむ」など握力を必要とする手の動きはできない。

そんな私にとって、山中選手は、私の目標とすべき人なのである。

私は今、中学三年生。来年の高校受験を控えている。将来への不安が無い、と言える、うそになる。

しかし、一筋の光が見えた。

昨年秋に、学校の授業で職場体験があり、私は、東日本旅客鉄道株式会社に行かせていただくことができた。

幼いころから鉄道路線図を覚えることが好きだった私にとって、夢の一つが叶った瞬間であった。

学校の先生のすすめで、履歴書にはハンディキャップがあることも記入し、将来の就職活動を思い描きながらの職場体験であった。

職場体験当日、JR八王子駅で私に仕事を体験させてくれた職員の方は、上肢機能障がいを持つ男性だった。ハンディキャップをもちながら職場の第一線で活躍する姿は、とても輝いてみえた。

そこで、“ダイバーシティ”という言葉を教えていただいた。

“ダイバーシティ”とは、多様な人材を活用し、それぞれの力が最大限発揮されることに、組織は留意するべきであるという考え方のことで、全て構成員が相互に、一人ひとりの持つ固有の特性、属性に敬意を払い、尊重し合うという精神が、その考え方の軸となっている。

JR東日本では、性別や年齢、国籍、障がいの有無にかかわらず、多様な人材がさまざまな業務において活躍しているようだ。

この“ダイバーシティ”の取り組みをしている企業について調べてみると、私が思ったより多くの企業が取り組んでいることがわかった。

私が就職する頃には、もっと多くの方が、この理念を理解し、実践する企業が増えていてほしいと思う。

この職場体験のおかげで私は、障がいをかかえていても障がいのない人と同じ仕事ができることを知り、一つの“希望”を見いだした。

“ダイバーシティ”というこの企業理念を推進していく一人になって、自分と同じくハンディキャップを持つ人が、職場の第一線で働ける環境が整っていくように貢献していきたいと思う。ハンディキャップを持つ人が、差別されない世の中を目指して――。

## 差別や偏見は無知から始まる

滋賀県 滋賀大学教育学部附属中学校 1年

中村 燎（なかむら かがり）

「ハンセン病家族差別敗訴 国の責任一転認めず」（平成三十年七月二十五日朝日新聞より）

私は今年の夏、家で目にしたこの新聞記事に触れるまで、ハンセン病について全く知らなかった。その記事の内容は、ハンセン病患者の隔離政策により患者だった母親と共に差別を受けたとする鳥取県の男性が、国などに損害賠償を求めたというものだった。私は、今の日本で一体どんな差別があるのかを知りたいと思い、資料やインターネット等で調べることにした。そして今回ハンセン病について調べていくうちに、今の日本で本当にこのような不当な差別や人権侵害があったのかと驚き、ショックを受けた。さらに、この差別が今もなお現在進行形であることに、私の中での疑問や憤りがどんどん増してきた。

そんな時である。この憤りについて母に話した際、母から古いビデオテープを手渡された。テープの内容は、小学校の教員をしている母が、若い頃ハンセン病患者の方が、病の中で絶望的な状況の中、どのように立ち上がり、またどのように患者の方々を支えていくことが大事であるかに興味を持ったため、実際に患者の方々をインタビューした時の記録だった。そのビデオには、瀬戸内海に浮かぶ離島という環境が、隔離に適していたため、日本初のハンセン病の国立療養所として発足した長島愛生園での患者の方々から、多くのことが語られていた。私が生まれる前、今から十五年ほど前のインタビューではあるが、その中には患者さん自身の肉声があった。例えば、母と話をしていた女性「島さん」。島さんは、とても穏やかな表情で丁寧に話しておられる。その手指の曲がった容姿から、ハンセン病であったことを伺い知ることができた。そして、島さんの名前は本名ではない。患者さんたちは愛生園に入所するにあたり偽名を使用させられたと言う。その時点で、患者さんたちは世の中から存在を消されてしまったのだ。そんな島さんから、ここに書きたくもないような迫害と差別を受けてきたこと、そして長い長い時間をかけて「らい予防法」が廃止されるまで、人権を取り戻すための闘いがあったと知った。

私は、怒りを持ってそのビデオを見ていたが、なぜか島さんには、自分の運命への恨みつらみがない。島さんから出てきた言葉は、「ここに来られて良かった。差別は受けたけれど、一緒に闘い生きた仲間や先生、お医者さんが居てくれたから。」というものだった。

数多くのハンセン病患者の方々全員が、島さんのように感じておられるわけではないかもしれない。でも、私は島さんの言葉を聞いて恥ずかしくなった。ハンセン病について調べ、患者の方々の心を理解したようなつもりでいながら、実はよく分かっていなかった。私の中にかわいそうだというような偏見があったのではなかったか。私は、ビデオを見てしばらくの間、心が重く自分の何が間違っていたのか考えることさえできなくなってしまった。数日後、私はもう一度心の中を整理してみた。私の「思い込みや無知が偏見や差別を生み出す」ことを強く感じた。島さんの「苦しかったけれど、自分の心まで病気になってはいけない。相手のことを思い続けることで、いつか差別はなくなっていく。」という言葉が重く、心に染みていく。これまでの私のように、何も知らなかったではすまされない。ハンセン病は治る病気であるのに、誤った知識が広まって、人権侵害が長く続いてしまった。同じ間違いを繰り返さないためにも、事実の風化を防ぐことが、今の私に出来ることだ。正しい知識を活用し、人々を助けられる人間でありたいと、私は思う。

## 「知る」努力と人権侵害

愛知県 愛知県立一宮特別支援学校中学部 3年  
佐々木 杏夏（ささき きょうか）

世界中の全ての人が人権を持っている。そして、差別や偏見は度合いに関わらず、紛れもない人権侵害である。そのことを踏まえた上で、それを防ぐ方法を考えていこうと思う。

まずは、私を知ってもらいたい。私は今、中学三年生だ。脳性まひという障害がある。歩くことが難しいので、現在は特別支援学校に通っている。小学生までは、地域の小学校にある特別支援学級に在籍していた。私はできないことが多かったので、色々な支援をしてもらっていた。楽しいこともたくさんあった。しかし、そんな中、私が常日頃感じていたのは、自分がいわゆる普通ではないということだ。時々ふとどこかに壁を感じることもあった。例えば、小学校の終業式の日。クラスメイトや下級生でさえ、その日特有の大きなかばんを重そうに持っていた。それに比べて私は、車イスを押してもらいながら帰っていた。荷物も車イスにかければ、私は手ぶらだった。当然、クラスメイトからは「良いな楽そうで。」と言われた。座り続けることは、かなり辛いもので、身体もよく痛くなる。そういう面での辛さを知らない相手の言葉には、やり場のない気持ちがわいてきてしまう。それに私もできることなら、重い荷物を持ってでも、友達と長期休みの予定を話しながら帰ってみたいと考えていた。

当時は分からなかったが、今思えばこの考え方の差を作ったのは、私とクラスメイトの間にあった「知らない」という壁だったと思う。私にはできないことが多いのが普通だったから、障害のない人やできて当たり前の人の気持ちは分からなかった。今でもきっと分からないと思う。ちょっとした言動に傷ついたこともある。ある人が私への質問を母に聞いていた。その時私は、母と二人で外にいた。目の前の私をしっかりと見ていたので、確実に目は合っていたのに。母は困ったように私を見た。あわてて私が答えると、その人は少し驚いて「あれ、しゃべれるんだ。」と言った。それに悪意がなかったと分かったのは、最近のことだ。クラスメイトやあの人も、障害のある人と関わることがなかったために私のことがよく分からず、こういう言動になったのだろう。

知らないというのはそれだけで怖いもの。誰でも、それまで存在すら知らなかったものに近付くのは勇気がいるだろう。だから、皆身を守るために、知らないものには心の壁をこしらえて、更に距離を置く。お互いを壁で遮っているのに、更にまた距離を置いているとなれば、分かり合えるはずがない。分かり合うため

には、この壁を取り払って、距離を近付ける必要がある。

私は、差別や偏見は、お互いを十分に知らないことで生まれると思う。だから、まず知る努力をしたい。あの「知らない」という壁を打ち破るためだ。しかし、身構える必要はない。知る努力はそんなに難しいものではない。インターネットで調べる。本を読む。漫画を見る……。手段はたくさんある。自分がなじみやすい方法を見つけ、知るきっかけを作る努力をすることが大切なのだ。

私にとっての「知る」きっかけは、特別支援学校に入学したことだ。環境が変わり、今まで経験してきた辛いことや悲しいことがさほどたいしたものではなかったと気づき、きちんと「経験」としてとらえられるようになった。小学校の頃の悩みだった「意見が言えない」ことも、機会がなかっただけのようで、今となっては笑い話だ。他のことでも、以前のように相手からの反応を待っている消極的なものではなく、自分から意見を言い行動するような積極的な過ごし方を見つけられたと感じている。これはささいなことかもしれない。しかし、かつての自分は数年後の自分が人権について考えたり、生徒会に関わるような人になるとは思いもよらなかった。もしこのきっかけがなければ、今の自分はなかった。

今、もし小学生の自分にアドバイスができるとしたら、「周りを見て、知ろうとしてみて」と伝えたい。小学生の時に傷ついたのは、知らなかったから。人見知りの私が、中学で変わったのは、人と関わるために初めて「知る」努力をしたから。これは障害者差別だけでなく、全ての差別に言えることだと思う。

知るという努力をするだけで、少し距離を近付けるだけで、差別や偏見をなくすことができる。これが、今の私が考える人権侵害を防ぐ方法だ。

## 「大切なこと」

高知県 須崎市立朝ヶ丘中学校 3年

寺村 優奈（てらむら ゆうな）

「ねえ、優奈だったらどう思う。」

新聞を置いた母は、ゆっくりと昔のことを話し出しました。それは母が学生時代、レストランでアルバイトをしていた時の体験でした。

ある日、車椅子に乗った方とその方を介助していた人が、トイレを借りるために店内に入って来られました。その時、店長さんは、

「ご飲食されない方のトイレの使用については一律五百円いただいております。」

と伝えたのでした。その店長さんの言葉を聞いた介助の人は、

「この人は障害者なんですよ。」

と、店長さんの対応に驚いたような口調で言いました。しかし、店長さんはそれでも店の方針を変えなかったそうです。そして、二人はそのままバスで帰っていったといいます。

私は母からこの話を聞いて、

「店長さんの対応は当たり前やん。」

と答えました。私の言葉が意外だったのか、母は目を丸くして、

「どうしてそう言い切れるが。でも、すごい。私が今でも答えに迷うことを優奈はちゃんと判断できるがや。」

と言いました。

母は高校生の頃から、ボランティアサークルに所属し、障害者の人達との交流が多くありました。そこで学んだノーマライゼーションという、障害者と健常者が助け合いながら暮らす社会のあり方が身についていたので、店の対応に疑問を感じつつも、介助者の方の「この人は障害者なんですよ」という一言が心に引っかかっていたといいます。

私はこれまで色々な場面で沢山の人権教育を受けてきました。障害者も健常者も、みんな同じ尊い命です。「障害者は特別な存在」、「障害者はかわいそうな人」という考え方は間違いで、障害者にとって障害は「個性」なのだと思えるようになっていました。だから、障害の有無に関係なく一貫した対応をとった店長さんは正しいと、まっすぐな気持ちで答えることができました。

しかし、私は障害者との交流がほとんどありません。習った知識だけでしか、障害に対して理解していないと気が付きました。障害者ともっと交わることがあ

ったなら、私の中の答えも変わっていたのかもしれないと思います。

看護学生だった母は、身体機能の低下がもたらす生活の困難さや、障害者を取り巻く社会情勢について学び、障害者の障害を、「個性」という側面だけで見ることが出来なかったと話していました。障害者が自分の障害を個性だと語るなら、それはその人にとっての個性だと思います。けれど、その個性の裏には、健常者が知ることのない様々な生活のしづらさがあります。だからこそ相手を思う心が必要だというのが母の本音です。

教科書通りに障害者を理解しようとする、本当に大切にしなければいけない根本的な部分を見落としてしまうかもしれないと感じました。

ここまで考えを深めて、やっと私は介助の方の一言の、違和感の正体が分かった気がしました。

たぶん、あの時の介助の方は、正義感にあふれていたのだと思います。「障害者という社会的弱者を私が守らなければ」「皆が支え合う社会が当たり前だから、店の対応は間違っていないか」そう伝えたかったのではないかと思います。けれど、一番大切にしなければいけなかったのは、介助の方の発した言葉を頭上で聞いていた、車椅子の方の気持ちではないでしょうか。

自分の身体を信頼してあずけている人に、「この人は障害者なんですよ」と言われた時の車椅子の方の気持ちを想像すると、私は胸が痛くなります。自分を「障害者」としてしか見られていなかったことへの驚きと悲しみの気持ちで一杯だったのではないのでしょうか。

母の心に長年このことがつかえていたように、車椅子の方の心にも、ささいな日常の一コマが、消化されずにすみついているのかもしれない。

私は最初にこの話を聞いて、すぐに「店長さんは正しい」と判断しました。でもそれは十五歳の私の小さな世界で出した答えです。きつこの先、沢山の出会いや経験をしたいと思います。一つ一つの出会いを大切に積み重ねていくと、今回の私の答えも変わって、今のような気持ちで、誰が正しいかと言えなくなる日がくるかもしれません。でも、一つだけ迷わず持ち続けたいと決めたものがあります。それは、障害者は障害がある人であって特別ではない。でも健常者も障害者も共存していく社会の中では助け合う心が大切だということです。

十年先、二十年先、またこの出来事を考えてみたいです。その時の私はどんな答えを出すのか楽しみです。



## 障がい者が生活しやすい社会

神奈川県 横浜市立早渕中学校 3年

神谷 綾音 (かべや あやね)

みんなの口をジッと見つめる。しばらくすると、みんなの肩が微妙に上がり、口が開く。

「今だっ！！」

私は口を開ける。でも、自分の喉は動かない。それに対して口はみんなの口の形と同じように動いていく。隣の子がこちらをチラチラ見てくる。「あー、まただ。」悔しさの粒が目の奥にたまる。そして、私は心の奥底から叫ぶ。誰かに。「みんなと同じように歌いたい！音楽を嫌いになんかなりたくない！」

音楽の授業。それは、私が苦手な科目だ。なぜなら、私は生まれつき聴覚障がいを持っているからだ。聴覚障がいの中でも私は、重度難聴だ。いつも人工内耳と補聴器を耳につけている。しかし、それをつけたからといって、みんなと同じように聞こえるようになるわけでもなく、リズムや音程が分かるようになるわけでもない。だから、私の歌声はリズムも音程も全く合っていないメチャクチャなものなのだ。みんなに迷惑をかけたくなくて、歌う時はいつも口パクになってしまふ。しかし、それが隣の人にばれてしまい、チラチラと見られることがしばしばあるのが辛い。

私が困っているのは、それだけではない。本当は人と話すことが大好きで明るい性格だ。一対一で会話をする時は、聞こえを補うために口を大きく開けて話してもらえば、口の形から話の内容を想像することができる。しかし、大勢での会話はあちこちで話すため、今誰が話しているのか分からなくなり、口の形を読めず、内容を理解することがとても難しくなるのだ。よって、会話の中に入れず、「おとなしい子だ。」と思われてしまうのだ。それが、私が話しかけても薄い反応しかしない子がいる原因につながると私は考えている。本当は私も大勢の仲間達と楽しく話したり、笑い合ったりしたいのだ。でも、何を話しているのか分からないので、みんなが笑っている時はなぜ笑っているのか分からないまま、みんなに合わせて笑っている私がいる。自分だけが内容を理解出来ていないと思うと、いつも辛く悲しい気持ちになる。

二〇一六年四月一日より施行された、「障がい者差別解消法」を知っているだろうか。これは、障がいの有無によって分け隔てられることなく、互いに尊重し合いながら共生する社会の実現に向け、障がいを理由とする差別の解消を推進することを目的としている。この法律が施行された翌年にアンケートをとったとこ

る、「障がい者差別解消法を知っている人」は二十一・九%、「知らない人」は七十七・二%にも上ったそうだ。また、「障がいのある人に対しての差別や偏見がある」と思う人は八十三・九%もいたそうだ。

私も、普段の生活で障がい者差別解消法が社会にあまり浸透していないのでは…と感じることがある。最近でも、娯楽施設で「付き添いのない障がい者の方の入場は、安全確保に不安がある」と、聴覚障がい者が耳が聞こえないことを理由に入館を断られたという出来事があった。障がい者差別解消法の目的と真逆のことをやっているともいえる。また、聴覚障がい者は音楽のリズムや音程が分からないため、音楽の評価や基準が皆と同じでは、圧倒的に不利になってしまう。それは不公平だと感じている。努力してもどうにかなるものではないからだ。だから、障がいを持っている人には別の基準を作って欲しいと私は思う。

逆に、浸透していると思うこともある。私は以前、英語のリスニングでテロップ表示の特別措置の対応をしてもらったことがある。本当にありがたかったが、特別措置対応可能日が一日のみであるため、都合がつかない場合、英検を受けることが出来なくなってしまうのだ。だから、特別措置が受けられる日を増やして欲しいと願っている。

私は、来春には受験を控えている。受験したい高校全てが英語のリスニングで配慮してくれるだろうか。私が打診したり、受験したりすることで、そういう子がいると気付いて、対応する学校が増えることを望んでいる。

障がい者差別を解消するために、私の立場で出来ること一。多くの人に聴覚障がいのことをもっと積極的に伝えることだ。人は本能的に見慣れないものに不安を感じ、近づかないようにする。どのように接すれば良いか分からず、声を掛けられない人もいると思う。だから、自分は何に困り、どうすれば助かるのかをアピールしていこうと思う。

私の夢は、デフリンピックのバドミントン選手になることだ。「デフリンピック」とは、まだまだ認知度は低いですが、聴覚障がいを持つ人々のためのオリンピックのことだ。選出されて私が目立つことにより、障がいのある人がますます活躍しているのが当たり前の社会になって欲しい。そのために、日々努力を重ねていこうと思う。

## 『良い学校』って？

岐阜県 恵那市立恵那北中学校 3年  
瀬瀬 ほのか（こうけつ ほのか）

「この学校はいじめのない良い学校です。」ある先生が言った言葉。あなたには、どう聞こえますか。この言葉、私にとっては信じがたいものでした。

いじめ。この言葉はすごく曖昧です。私は中学二年のとき、何人かの女子から悪口を聞こえるように言われたり、嫌がらせを受けたりしていました。とても辛かったです。でも、いじめだと思ったことはありませんでした。いじめって、不登校とか自殺とかにまで人を追い込んでしまうもの。私が受けているのは軽い嫌がらせ。いじめはもっとひどいものだ。そう考えていたからです。休んだら女子たちに負けたことになる、思うつぼだ、そう思って、歯をくいしばり毎日学校に行き続けました。ただただ耐えて、涙をこらえて過ごしていました。

辛い状況が少しでも良くなればと、母や担任の先生にも相談しました。私は先生に「辛い状況は変わってほしいけれど、みんなには言わないでほしい。」と話しました。もし私の気持ちをみんなに伝えたら、もっと状況がひどくなるのではないか、でもこんなに辛いのは嫌だ、そんな気持ちの葛藤の末の言葉でした。話した数日後の、道德の授業。先生が配ったプリントには、自殺した生徒たちの遺書がいくつか載っていました。読んでみて衝撃を受けました。「私とされていること一緒じゃん！」そうです。遺書には、「聞こえるように言ってくる悪口に耐えられない」など、私と同じようなことをされて亡くなっていく子がいたのです。私のされていることもいじめなのか、初めてそう思いました。また、「何年前にいじめられていて、今は何もないけれど、突然記憶がよみがえってきて発作のようになり、屋上から飛び降りて亡くなってしまった。」という子もいました。耐えれば良い、いつかは変わる、私はそう思っていたからこそすごく怖くなりました。そして気づきました。状況が変わればすべて終わるわけではないのだと。

「この学校はいじめのない良い学校です。」このような心境にあった私に降りかかってきたのがこの言葉です。聞いたとき、耳を疑いました。周りの目を気にしつつ、溢れてくる涙を拭っている私がいまいました。苦しみが伝わっていない。この学校では辛い思いをしている人が誰一人いないことになっている。悔しかった、ものすごく。後輩にも、苦しんでいる子がいるのに。なぜそんなことがはっきりと言えるのか。悲しみと共に怒りもこみ上げてきました。

「いじめ」って何だっけ。やっぱり私の受けていたものはいじめではないのだろうか。では、自殺してしまった人たちの場合は…？頭も心もぐちゃぐちゃで、

訳が分からなくなり、私は母に涙ながらに話しました。母が教えてくれたのは、「いじめ防止対策推進法」でした。調べてみるとそこには、いじめの定義として主に「児童に対して他の児童などが行う心理的または物理的行為であり、その対象となった児童が心身の苦痛を感じているもの」と書かれていました。つまり、受けている側が苦痛を感じている、それだけでいじめとなるということです。いじめている側は、いじめているつもりはないかもしれません。周りも、いじめではないと思うかもしれません。たとえ、本人がいじめだと感じていても。人それぞれ感じ方は違います。当たり前です。だから、あの先生が「いじめのない学校」と言い切ることはできないはず。苦しんでいる生徒がいるかもしれないのに…。

私は、小学生のときも立場が弱く、言い返すことも何もできず、されるがままでした。だから、中学でも「ほのかになら何をしていても良い」そうになっていたのだと思います。「これくらいなら大丈夫。」そんなことは一つもないのです。いじめに基準はない、私はそう思います。

『良い学校』って？

やっぱり、「いじめのない学校」とははっきり言えるところでしょうか。いや私は、一人ひとりの気持ちを尊重し、いじめをなくそうと努力している学校だと思います。なぜなら、「いじめられている」そう感じた時点でいじめと言えるから。周りの人が勝手に決められるものではないから。苦しんでいる子がいるのに、人の気持ちを知らずして、「いじめがない」と言うのは信じられません。

私は今、辛い思いをせず、楽しい学校生活を送ることができています。理由はわからないけれど、悪口や嫌がらせがぐんと減りました。すごく辛かった、でもあの経験に学ぶことは多くありました。いじめを全てなくすことは不可能に近いと思います。だからこそ、いじめを「ない」ことにしてしまうのではなく、しっかり向き合って、なくす努力をするべきです。

## 境界線のない社会へ

大分県 大分市立原川中学校 2年  
熊谷 一輝（くまがえ かずき）

小学校からの僕の友達に、たっくん、りょうが、みっくんがいます。たっくんは、体が大きくて、力がとても強いです。時々不機嫌になるけれど、根は真面目です。りょうがはとても素直で、裏表がありません。そして、みっくんは人とコミュニケーションをとるのが苦手だけど、生物の知識はとても豊かで、東京大学の先生が主宰する異才発掘プロジェクトのメンバーに選ばれるほどです。ぼくのこの三人の友達は、ひまわり学級にいました。

三人の中でも、みっくんとは一番よく話をしました。僕も、みっくんも、海の生物が大好きで、生物に詳しいみっくんとは、とても話が合いました。先生のすすめで、みっくんは僕と同じ委員会や係活動をすることが多かったです。

僕にとって、三人はとても大切な友達です。今、三人は違う中学校に通っているので、なかなか会うことが出来ません。僕は時々、「三人はどうしているのかな」「みっくんと、生物の話を沢山したいな」と、思います。

そんな時、テレビで日本理化学工業という会社の事を知りました。この会社では、チョークを生産していて、国内の三割の生産率という立派な業績があります。僕が驚いたのは、それだけではありません。全従業員の七割が知的障がい者で、そのうちの約半数が重度の障がい者という事です。しかも、五十八年前から知的障がい者を雇用しているのだそうです。僕は、とてもすごい会社だなと思いました。

健常者にとっては簡単で、当たり前なことでも、知的障がい者にとっては、理解したり、行ったりするのが難しい時がよくあるのだと思います。でも、この会社では、知的障がい者にも理解しやすいように、そして、作業しやすいように、一人一人に合わせて、社長さんたちが工夫していたのです。僕は、会社や工場では、決まったやり方で仕事をしなければいけないのだと思っていました。でも、そうではなく、障がい者の目線に合わせて変えることが出来たら、障がい者に出来ることが増えるんだということに気付きました。

日本理化学工業の社長さんは、どうして障がい者を雇用するようになったかという、禅寺のお坊さんの教えがきっかけでした。

「人間の究極の幸せは、一つは愛されること、二つ目はほめられること、三つ目は人の役に立つこと、四つめは人に必要とされることの四つです。福祉施設で大事に面倒を見てもらうことが幸せではなく、働いて役に立つ会社こそが、人間を

幸せにするのです。」

僕は、すごく素晴らしい教えだなと思いました。そして、その通りだなと、とても納得しました。

社長さんが、仕事が終わると毎日、「今日もよくがんばったね、ありがとう」と、声をかけると、知的障がい者の人たちは、心から嬉しそうな顔をするのだそうです。それで僕も、ふと思い出したことがあります。僕がひまわり学級に行った時の三人の顔です。

学年活動の時間の前、僕はよく三人をひまわり学級に誘いに行きました。すると三人は、とても嬉しそうで、やる気に満ちて生き生きとした顔になりました。ひまわり学級の先生から、母は、「いつも一輝さんが三人を誘いに来てくれるから、とても助かっています。」と、言われたそうです。僕は、みんなで一緒に活動できたらいいなと思って誘いに行っていました。特に決めていたことではなく、いつも何気なく誘いに行っていたけれど、三人は、「必要とされている」と、感じてくれていたのかもしれませんが。そう思うと、僕は、三人を誘いに行っただけでよかったと感じています。

障がいがある友達と、ない友達の、違いは何だろう。僕は考えてみたけれど、何の違いも思い当たりません。障がいがあっても、無くても、僕にとってはみんな大切な友達です。何も差はありません。

この世がもしも、健常者だけで成り立っている世界だと想像したら、何の具も無いタコ焼きみたいなものです。タコ焼きには、タコも入っていれば、キャベツやネギも入っている。ソースやマヨネーズもかかっているし、青のりやかつおぶしだっただけかかっている。僕は、社会も同じだと思います。健常者だけでなく、障がいや病気をかかえる人たち、小さな子どもやお年寄り、日本人や海外の人たち、男の人や女の人、いろんな人がいるのが社会です。健常者が偉いわけでも、一番なわけでもありません。大切なのは、理解すること、協力することだと思います。そして、みんなが平等であればいいなと思います。決して簡単ではないと思うけれど、それでも僕は、境界線のない社会になっていくことを目指して、僕に出来ることを考えながら、これからも行動していきたいです。

## 心をつなぎ 伝えたい

福島県 福島大学附属中学校 1年

橋本 花帆（はしもと かほ）

私は外国人だった。ある日突然、外国人になった。そして初めて、痛みを知った。差別されることの悲しみを知った。

小学五年生の秋、木枯らしが吹く寒い日だった。その日は、放課後のスイミングスクールがあり、駐車場に停めた車から降りたところだった。目の前をゆっくり走る車の窓から、白人の若者達が何かさげんでいる。

「・・・Go back・・・。」

聞き取れた言葉はそれだけ。ゴージャック、帰れ？少し不安になり母を見上げた。

「見てはだめ。走ろう。」

母は私の手を引き、急いで建物へ向かう。顔が青ざめていた。私はあの若者達から嫌われているらしい、そう思ったらカッと身体が熱くなった。

アメリカに来て初めての出来事だった。小学三年生の時、父の転勤でシカゴへやってきて、たくさんの方が私を助けてくれた。髪の色が違う。肌の色も、目の色も、言葉も生まれた国も違う。でもそんな事は関係なく、皆優しく親切で、困っている時には、支え助けてくれた。幼かったからなのか、気付かなかったのか、私には全然見えていなかった。知ろうともしなかった現実があったのだ。

「シカゴの南はブラックの犯罪地区だから近付いてはいけないよ。」

と現地の人に言われた時は、ここは北だから安心だな、という認識しかなかった。区別も差別も、何も考えられなかった。

ところが、大統領選挙が近付くと、少しずつ周りの雰囲気が変わってきた。それが五年生の秋。あの日のスイミングスクールの帰り、母が言った。

「白人に何か言われても、気付かないふりをして通りすぎなさい。若者は熱くなってるだけだから。大丈夫、少しのがまん。」

運転しながら話す母の声は、緊張していた。そんな事を言われたのは、初めてだ。けれどそれは、すぐに現実となる。

買い物へ行くと、私達を見てムスツとする人、笑って通り過ぎる人もいた。何かを言われた時、ある言葉が私につき刺さった。

「Immigrant！」

イミгранト、移民と呼ばれる人々の事だ。難しい政治の事は分からない。なぜ移民が悪い人のように言われるのか、なぜ私もそう呼ばれるのか、分からないけれど知りたいと思った。

「今の一部の白人にとっては、メキシカンもアジア人もブラックも、ここから出て行ってほしい存在だから。」

母はとても悲しそうだった。

「今週もダウントウンで差別反対のデモがある。しばらく街中には近付かない方がいい。」

父はニュースを見ながら怖い顔で言った。

私は大人達の声に耳を傾けた。友人にも話を聴いた。大統領がメキシコ国境に壁を作ろうとしている事、古き良き時代を取り戻すため移民を排除しようとしている事、自国第一主義という考えが広がっている事、そういう話を初めて聴いた。初めて知った。

心に小さなトゲが刺さった。待ち針が刺さったような、チクツとした痛み。その待ち針は増えていって、私の心は針山のようになってしまった。けれど、汚い言葉や怖い言葉を針のように投げつけられてチクツと刺さったこの心で、差別される側の痛みを知る事が出来たのだ。人は同じ痛みを知る事で、心から相手を理解出来る事がある。

日本へ戻り、中学生になった私は、見えなかった世界にようやく気が付いた。安い賃金でやとわれるアジア人労働者、日本の技術研修に来ていたはずが、知らずにやらされていた原発での除染作業、朝鮮学校前でのヘイトスピーチ。外国人の人権問題は、新聞やテレビ、ネットの世界でも取り上げられていた。そして私は、日本で「外国人」と呼ばれる人々の差別や痛みを知ったのだ。

差別はなぜ生まれるのか。なぜ人種や国で区別され、ひどい扱いを受けることがあるのか。どうしたら差別を無くす事が出来るのか。経験から分かった事は、知る事だ。大切なのは、知る事なのだ。相手を知り、痛みを知る事で人種や国での区別も、そこから生じる差別もなくなる。知る事で、知り合う事で、他人は友人になる。外国人は、大切な一人の友人になる。差別を生んでしまうなら、「外国人」なんて言葉は必要ない。国という壁を越えて、壁を壊して、同じ人間としてつながっていけばいい。友人としてつながれたら最高だ。多くの人が願う事で、多くの人が望む事で、多くの人が声を上げる事で、差別の壁は崩れていくはずだ。

だから私は発信する。声を挙げて、自分の痛みを分かち合う。恐れずに発信すれば、きっと受け取ってくれる人がいる。人種や国を越えてつながる温かさを、平等がもたらす幸せと平和を日本中に伝えたい。そういう優しさと温かさを世界中に伝染させたい。